

Homosexualität. Wie die Genderperspektive die theologische Einstellung zur Homosexualität verändern kann

Antonio Autiero

時代の変化における同性愛とキリスト教倫理

アントニオ・アウティエロ（ミュンスター大学名誉教授）

Übersetzt von Tomohiro Shiomi

塩見 智弘 訳

同性愛というテーマへの考え方、特に同性愛者に対する姿勢がここ数十年の間に著しく変化したことを、われわれ全員が目に見ている。社会、宗教、教会、神学、哲学、倫理学、これらは部分的にはあるが同性愛への先入見をすでに点検しているし、この先も点検していくはずである。

われわれはそのような変化を、その意図と含意に留意して理解するべきである。私はこの講演でその変化を生じさせたいいくつかの重要な要因を提示しようと思う。

1. 社会の編成

第一の要因は、今日の同性愛という現象に伴う社会の受け止め方に関連する。われわれは近代の批判的文化によって、同性愛者に関する差別のあらゆる形式が、解放を目指す近代の主観哲学とは対照的であると感じることができている。

同性愛者への新たな姿勢は、彼らの包摂と尊重を可能にするために、現代社会における法の整備も要求する。同性愛的な関係の新しいかたちの承認をめぐる議論が公の場で行われるという性格を持っていることそれ自体が、この新しい社会編成の一部をなしている。この新たな編成のためには、宗教—ここでは特にキリスト教カトリック倫理—において描かれていたような、同性愛に対する伝統的な見方の克服が決定的な役割を果たす。

2. カトリック教会：司教団の動向は？

第二の要因は、同性愛に対するカトリック教会の道徳の教えが更新されたことのうちに見出される。現在、教会は原則として「同性愛的な指向」と「同性愛的な行為」を区別している。自然の秩序に反するという理由から同性愛的な行為は認められていないのに対して、だれかが同性愛的傾向/指向を持っている場合、それ自体は個々の人間の一つのかたちとして見られるべきであり、非難されるべきではない。

このことはカトリック教会のカテキズム(1997年)の No.2357-2358 で見ることができる。(以下、『キリスト教会のカテキズム』(カトリック中央協議会、2002)、pp. 684-685 より引用。括弧内は

ドイツ語原文に従い訳者が補足したものである。)

2357 …これ〔性愛の行為〕を重大な墮落としている聖書に基づき¹、聖伝はつねに、「同性愛の行為は本質的に秩序を乱すもの」²であると宣言してきました。同性愛の行為は自然法に背くものです。これは生命を生み出すはずのない性行為です。真の感情的・性的補完性から生じるものではありません。どのような場合であっても、これを認めることはできません。

2358 無視できない数の男性や女性が、同性愛の根強い傾向を持っています〔持って生まれてきている〕。この傾向は、客観的には逸脱ですが〔自らで選んだものではなく〕、彼らの大部分には試練となっています。したがって、同性愛的な傾向を持つ人々を軽蔑することなく、同情と思いやりの心をもって迎え入れるべきです。不当に差別をしてはなりません。これらの人々は、自分の生活の中で神のみ旨を果たすように、キリスト信者であれば、自分のこの傾向から生じる困難をキリストの十字架の犠牲と結び合わせるように、と呼ばひかけられているのです。

同性愛行為の拒絶は、聖書の中にある教えの伝統や道徳的な自然法、そしてジェンダー的相補性(男性—女性の相補性)という諸要素に立ち返ることによって根拠づけられている。

3. 神学的議論

伝統的な道徳教説は、聖書釈義(Exegese)*と人類学的な神学の省察に見いだされる諸要素に立ち返るという論法を取っている。それゆえ聖書解釈(Interpretation)をし、これら諸要素を展開する場合に、神学や神学的倫理はどのような貢献を果たしうるのかを見極めることが極めて重要である。

- a.) まず聖書釈義の段階において、聖書のテキストが成立し受け入れられた、文脈上の諸要因に今日一層多くの注意が払われていることが確認できる。特に、聖書のテキストが成立した社会史的小および宗教儀礼的な背景を考慮に入れることは重要である。通例では、この聖書のテキストは同性愛的な人間の条件ではなく、むしろ同性愛行為という事実を問題にしている。今日の議論は、この行為の事実という考察の方向を反転させ、人間二者間の関係の事実を問題の中心に置く。
- b.) 今日とりわけ熱心に、「自然」概念と「自然法」の概念は新たに反省され、新たに規定されている。ここでもまたこの概念は、性的行為の自然との整合性を意味するのではなく、人間のもって生まれた体制(Verfasstheit、訳者補足：英語のConstitutionに当たる)の自然性と、自己の存在を「関係的」に形作る人間の能力を意味する(Natura humana)。これは結果として、セクシュアリティの目的(Finalität)を、もはや生命の再生産を通して定義するのではなく、

関係能力を通して定義し直すことになる。それによって、とてつもなく重要なパラダイムシフトが生じる。

- c.) この新たなパラダイムの観点からは、倫理においては、「徳倫理」(Virtus ethics – J. Keenan) というアプローチで大きな反響を呼び実践的な含意を見出すことのできる視点が優遇される。

4. ジェンダーの視点

キリスト教倫理は常に創世記第1章・2章(天地創造の歴史)に記された聖書の立場を引き合いに出し、セクシュアリティの評価をするための論拠として、あるいは同性愛を拒絶するための論拠として、男性/女性のジェンダー的相補性の図式をつくりあげてきた。この相補性は、人間身体の生物学に強固に関連付けられ、また様々なレベル(社会、文化、法律、道徳)で引き出された諸結果の出発点として受けとめられてきた。この相補性は、男性を頂点とし女性をその下位に位置付ける階層秩序に直接結び付けられた。そうして歴史を通し多くの伝統の中で、男女の不平等の文化、女性を不当に扱い差別する文化が生じた。これらはいわば「自然に即した」ものかのように考えられていたのだ。そのような見方の結果、格差の視点が強く協調され、その際ジェンダー特有の人間関係の現実のうちに存在する人格の統一の視点はおろそかにされるのである。

それに加え、ここ数十年の「ジェンダー研究」は新たな視点を持ち込んできた。すなわちこの研究は、一人の人間のアイデンティティの構造が、生物学的法則性あるいは実体形而上学に基づいてのみ形成されるのではなく、社会文化的な要因からも影響を受けて形成されるということを明らかにしたのだ。

人間相互間の関係のうちにあるアイデンティティと関係そのものについて理解するためのジェンダー研究は、自身の自己知覚と文化的に固定された役割を越えて他者と接する方法との間の動的な見方を可能にした。

5. 性道徳における重心の移動

最後の要素を指摘したい。それはセクシュアリティと性道徳の根本的な理解形式に関するものである。

人間のセクシュアリティを倫理的に評価するための基準は、もはや「単一的な」視点(生殖を目標とするセクシュアリティ)のうちに探し求められるものではない。むしろ、「多角的な」視点で(多種多様な意味レベルで)理解されるべきものである。これに関し、二人の人間間の関係を道徳的(sittlich)な次元と性的な次元とに適切に分類し、またそれらを道徳的(moralisch)に評価するためには、関係倫理学(Beziehungsethik=relational ethics)というアプローチが極めて適している。これらの関係が「道徳的に好ましく」形成され得るために重要な役割を果たすのは、人間人格の生物学的な地位(ジェンダーという属)ではなく、むしろ公平性、相互性、誠実さ、他者の決定の自由の尊重といった価値観念である。

結論

以上で言及された要因は、同性愛のために社会や神学、哲学、倫理学のなかに新しい空気を作り出そうとする場合に、たしかに大きく作用する。特に、尊重・包摂・承認・連帯の姿勢を最優先にして同性愛者と接するためには決定的な役割を果たす。

それに加えて、人格の権利とパートナーあるいは家族での共同生活の承認という場面で、同性愛者のための具体的な条件が最適化され得るために、社会上の転換が促進されることが期待される。

注

¹ 創世記 19 章 1-29 節、ローマ書 1 章 : 24-27 節、第一コリント 6 章 : 10 節、第一テモテ 1 章 : 10 節を参照。

² 教皇庁教理聖省『性倫理の諸問題に関する宣言』8 (中央出版社、1976) を参照。

* 古代ギリシア語の “ἐξηγέομαι” 「～から導き出す」が語源。釈義(学)とは、現代聖書学における厳密な意味合いでは、聖書テキストの本来的なテキストの意味を明らかにする作業を指す。この点で解釈者がテキストに新たな意味形成に参加しつつ、今日に対するテキストの意義を明らかにする「解釈学 (Interpretation)」とは区別されることが多い。(中野実)『聖書学用語辞典』(日本キリスト教団出版局、2008)、「釈義」の項参照。